

京都大学	博士（教育学）	氏名	若佐 美奈子
論文題目	無意識的空想への治療者の影響に関する心理臨床研究 —女性治療者の妊娠・出産に注目して—		
（論文内容の要旨） 本論文は、治療者と患者という治療関係が、心理療法過程を促進することや阻害することもあり得ることに着目し、その影響について、精神分析的な心理療法の理論的枠組みや実践技法に準拠し、患者がもつ「無意識的空想」の諸相について詳細な検討を行ったものである。精神分析的な心理療法においては、治療者は患者の無意識的空想を理解し、解釈を伝えていくことで、患者の無意識や情緒体験の意識化をめざし、自己理解を促すことを重視している。それ故、治療者はそれを妨害しないように、自分自身の人生上の出来事や価値観等を開示しない「匿名性」や、「中立性」を守るように努める。しかし治療者もそれぞれの人生を生きている人間であり、そのライフサイクルにおいてはさまざまな出来事が起こりうる。とりわけ女性の妊娠や出産においては、外見上の変化や休職を余儀なくされることから、その匿名性が保ちにくい。従って本研究では、患者の無意識的空想に治療者がどのように影響を及ぼすのかについて、女性治療者の妊娠・出産に焦点をあてて、明らかにしていくことが目的とされた。 まず序章において、上記のような本研究における問題提起を明確にまとめ、続く第1章において、無意識的空想や転移といった精神分析理論の概念整理を行い、歴史的背景や、転移現象としての無意識的空想の現れについてまとめながら、本論文で展開すべきキーワードをまとめている。第2章では、国内外の先行研究として「治療者の妊娠が心理療法に及ぼす影響」を取り上げた調査研究、インタビュー研究、事例研究等を概観した。第1章とあわせて、本論文の仮説が生成され、ここで取り上げる重要な課題として、治療者の妊娠を告げた後の患者の反応が肯定的か否定的かの分類ではなく、患者の反応に対する治療者の理解と解釈の方法と、そこからもたらされる反応が、治療経過でどのような意味をもって展開していったのかを丁寧に検討していくことであると明確にした。さらに第3章では、本研究におけるさらに深い視点の構築のため、クライン派精神分析の知見にあたり、無意識に眠る妊娠・出産をめぐる空想の諸相や力動的な意味について探求した。 これらの論考を経て第4章では、治療者の妊娠と患者の無意識的空想をつなげることをテーマとして、著者がかかわった2事例から、出産前での治療プロセスと共に出産休暇後には、これまで扱えなかったテーマと取り組むことが可能になっている在り様を示す。そして治療者の体験が患者の無意識的空想とどのように関連づけられるかを正確に理解して解釈を伝えることはもちろんのこと、治療者に生じる逆転移のモニタリングの重要性を説く。さらに第5章では、治療者の妊娠を契機に変化した治療プロセスをテーマとして、著者の妊娠・出産による影響を複数回受けた患者との心理療法過程も含め、2事例を取り上げて検討を進めた。面接空間での行動化の意味や、スーパーヴィジョンという第3の視点の重要性も含め考察を深めている。 終章では、治療者は匿名性を目指し続けるものの、それが完遂できない事態を受け入れ、匿名性の治療的意味を考えることの重要性を見出す。治療者の妊娠を治療に活かすための条件として、「患者の無意識的空想の理解」、「患者の自己探索を現実的に促進すること」、「逆転移のモニタリングとその利用」、「治療空間のコンテイング」を挙げて総括とし、男性患者や子どもとの治療での検討を課題として、本論文は締めくくられている。			

(論文審査の結果の要旨)

心理療法、とりわけ精神分析的な心理療法においては、治療空間における患者の抱く無意識的空想を適切に理解して、解釈を伝える作業を丁寧に積み重ねることを重視するために、可能な限り治療者の個人的背景を開示しない努力が払われてきた。しかし、治療者は、そのライフサイクル上にさまざまな出来事に遭遇し、それらとの対峙もまた訓練の一つと捉えながら、自らの歩みを進めて行く。とりわけ女性の治療者における妊娠・出産のテーマは、大きな課題としてライフサイクル上に浮かび上がる。本邦では、女性臨床心理士が圧倒的な割合を占める現状にもかかわらず、諸外国に比べ、治療者の妊娠が治療に与える影響に関する研究が、充分になされていない。しかしようやく女性治療者のライフサイクルやセクシャリティをめぐる問題が、心理臨床学の俎上に乗り始め、事例研究、実証研究の増加や学術雑誌の特集、学会等において取り上げられるようになってきた。序章においては、このような背景を鑑み、先行研究での結果を踏まえ、本研究では、患者の無意識的空想に治療者がどのように影響を及ぼすのかについて、女性治療者の妊娠・出産に焦点をあて、明らかにしていくことが目的と明記され、その現代的意義を主張して導入の役割を果たす。

続く第1章で、先行研究を概観しながら、これまでの研究では、治療者が妊娠・出産によって起きる困難を治療者側のメンタルヘルスや治療者アイデンティティの問題として捉えることが多く、ともすると治療者側の心身の弱さや、治療者としての限界、罪悪感といったテーマで考察が進められてきたことが明らかになる。本論文ではさらに、治療者の妊娠が「患者の空想をひっかける釘」(上別府 1993)であるという視点を重視して、患者が治療者の妊娠をどう体験し、それによって治療プロセスがどのように変容していくのか、両者の関係性も深く考察しながら、無意識的空想という軸を中心に検討を進めている。第2章では、治療者の妊娠・出産をめぐる調査研究、インタビュー研究や事例研究の国内外の先行研究を丁寧にサーベイしていく。この緻密な文献研究が、著者の精神分析学という立ち位置を明確にし、さらに本論文の心理臨床領域での汎用的意味をもたらしている。これを踏まえて、第3章では、著者の理論的視点であるクライン派精神分析理論に立脚した概念整理をさらに深め、事例研究の考察の視点を明確にし、次章の論考へと展開する。

第4章では、精神病水準の問題を抱えた事例と、ヒステリカルパーソナリティの問題を抱えうつ症状をもつ事例との治療プロセスが、重厚な事例研究としてまとめられている。第3章でまとめた「患者の転移を理解すること」、「患者の自己探求を促進すること」、「逆転移をモニタリングし、利用すること」という、先行研究をふまえた仮説がしっかりと事例によって考証されていき、本論文の考察が、読み手を納得させる力を持つと評価できる。さらに第5章では、スキゾイドパーソナリティの問題を抱え、治療者との交流が極めて難しい事例との治療プロセスを取り上げる。そして最後に、著者の3回の妊娠・出産を共にした、多彩な問題を抱える事例との治療プロセスを素材とした事例研究でまとめられている。それぞれ、著者の妊娠を契機に大きな局面を経験し、著者自身がその機会をしっかりと把握して、治療に活かしていく様相が丁寧に記載されている。そしてすべての事例に渡って、逆転移のモニタリングの重要性や、そのための個人分析やスーパーヴィジョンという第3の視点の重要性が主張される。またこうした治療が治療空間をコンテイングする主治医や治療機関の機能に守られてこそ活かされるという謙虚な姿勢も見出される。そして終章では、現代における治療者のライフサイクル上の問題と匿名性という意義を再考しつつ、後者が発揮できない時にこそ、治療者自身がそれを受け入れ、治療に活用する重要性を説く。各章の主張が見事に絡み合っ、心理療法における治療関係について、現代的意義を持つ、価値ある論考と評価できる。

試問では、本論文の仮説生成時に取り上げられた先行研究との明快な異同や、出産時休暇を控えた直前の面接での配慮すべき点と同様に、出産後の再開時の工夫点について明記すべきという点が指摘された。また、治療者自身が抱えている胎児への感情や空想が治療に持ち込まれることが考えられ、治療者、胎児、患者との三者関係という視点も考察できるとの意見が出された。さらに、治療経過のどの時期にそれを伝えていくのか、また本論文の事例がすべて女性であった点から、治療者の妊娠の時期の無意識的意味についても議論が展開した。しかしながらこれらの点は、本論文が心理臨床学におけるさらなる発展の可能性や、高い意義を意味するものと位置づけることができ、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 28 年 1 月 13 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降